

Original Hand Made Lure 2

ビッグゲーム・ルアー入門

小野塚 裕志

by Yuji Onozuka

P. 49より続く

＜素材＞

●牛の角

ひと口に牛の角と言っても、和牛、水牛、黄牛など、それぞれの角で色合いにかなりの違いがある。和牛は赤牛と黒（青）牛にわかれ、水牛は殆ど黒色系である。現在、和牛が若くして屠殺され、大型の角を探すのが難しい中で、黄牛は大きな角も入手しやすい。

屠殺場から入手した角は、角の中に肉髄が入ったままなので、急ぐ場合には角の中に熱湯を注ぎ込むと肉髄が収縮するので簡単に抜き取れる。気長にやるには、角を土中に埋めて肉髄の自然分解を待つことだ。

●マッコウ鯨の齒

これは、前歯か奥歯によって入手に難易があり、大型の奥歯はなかなか手に入りにくい。また、捕鯨全面禁止となれば、非常に貴重なものとなるだろう。

●カバの牙と象牙

印鑑店等で比較的簡単に入手できる。マッコウ鯨に比べて光の反射は弱いものの、牙が大きいので細工が容易である。カバの牙の難点はヒビが入りやすいことで、象牙は格子の目の粗いはっきりとしたものが良い。

●メカジキの吻（ヒル）

油のにじみ出ていないもの、髭の少ないものが良い。良い物は水の中でかすかに淡いブルーに光る。

●海松

金ヤギと青ヤギと呼ばれる物に分かれ、ベアリング海など北海の物が目がつんでいて良い。

●貝類

まずアワビ貝だが、アワビの中で1番色が鮮やかであるメキシコ・アワビや、淡い上品な色をしているアメリカ・アワビが良く、できるだけ大型で髭のない殻を選びたい。

白蝶貝、黒蝶貝も加工が簡単であるが、白蝶

貝はピンク色の濃い大型が良く、黒蝶貝は小型なので、合わせて作るか、カツオ、メジなどの小物用バケに向いている。

ウグイス貝とも呼ばれるマベ貝は、黒蝶貝よりもピンクの色合いが優れている。これも合わせか、カツオ、メジ等の小物用にしたい方がよい。

巻き貝の一種である夜光貝は、ピンクとブルーの色を持ち、大きく重いものが良い。

＜材料の入手方法＞

昔は、角が欲しい時は屠殺場に、メカジキの吻が欲しい時は突きん棒船に頼んだり、また、海松が欲しい時は北海に出る漁師を紹介してもらったりといった按配であったが、今一番手つとり早く確実な方法は、釣り道具屋で買うことです。現物が揃っていないくとも、気長に頼んでおくことです。

ルアー作りの勘どころ

さて、自分の欲しい素材が手に入ったら、後はもう真剣勝負です。何しろ貴重品ですから、最初カジキ用のバケを作っていて、削り過ぎてヒラマサ用に、さらに気に入らずにカツオ用に、それでもダメでメダカ用に!?というようになっては困ります。また、素材によっては制作過程でヒビ割れが入ったりしますので、そうならないためにも下ごしらえが必要となります。

●海松

例えば海松の場合、あらかじめその素材からどんな形の、どのくらいの大きさのものを作るかを考えます。なにしろ魚が喰うバケでなければいけないのですから、自分がこう作りたと思って、そこに枝を切った節があれば、その部分をハカマの部分にしたり、逆に金色の素晴らしい部分がかまを作る予定のところに來てしまったら、思いきってハカマの無い形で作り後に鉛等でハカマの部分をつけたりします。

海松は非常にしろい物ですから、割れないようにしなければなりません。海松の断面はパー

(図1)

“アロンアルファ”を上からしみ込ませる



ムクーヘンのように何層にもなっていますのでそこに瞬間接着剤を流し込みます。その際、下方にアルミ箔をかぶせて、接着剤が流出ないようにします。(図1)。既にもろくなっている海松は、あらかじめ糸でグルグル巻きにして接着剤を流し込みます。海松の場合、素材が柔らかいので後は比較的簡単に作業を進められます。

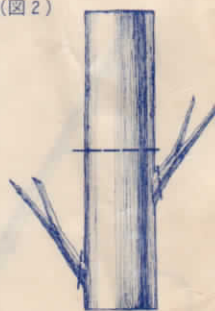
次の図のような海松の場合(図2)、私なら、ルアーを2つ作ること(図2)

を考えて切ります。カットした枝の部分はカツオ、メジ等の小物用バケに使います。さて、2つに切断したうちの上部は、枝を切った跡はありませんが、寸法が少し短くなります。そこで、先ほど書いたように、ビニール・ペイトを付けるハカマの部分を後で付けます。

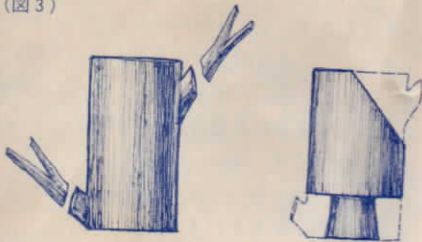
もう一方の下部分は、2カ所ある枝の切断面のうち片方をコナヘッドとして削ってしまい、もう片方はハカマとしてビニール・ペイトの中に入れてしまいます。

魚はバケを前方から狙うことはしませんので必ずヘッド部分の光の筋が後方から見えるように、その前後の位置を決定します。

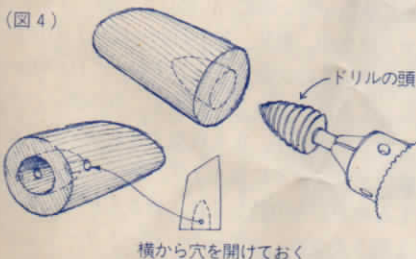
次にハカマの取り付け方ですが、まずヘッド



(図3)



(図4)



横から穴を開けておく

の下部に太目のドリルで穴を開け、次に鉛を流し込んで作ります。ハカマの型は特別に作る必要はありません。ヘッドの部分に銀紙を貼ったボール紙を巻きつけ、そこに鉛を流し込むだけで充分です。鉛は後でいくらでも好きな型に削れます。

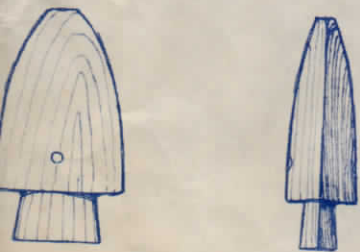
●牛の角

牛の角の場合、角の先端部分を使えば削り出しの無垢のものが作れますが、角のかかなりの部分が空洞となっているものが多いので、結局、貼り合わせのものが多くなります。

牛の角を削る際の大事なことは、どこまで削ればその角の最高の光り具合を得られるか、水に浸しながら探り出すことです。また、貼り合わせの場合、どうしても接着しただけでは剥がれやすいため目釘を打って補強します。目釘の材料は同じ素材で作るのが望ましいのですが、とかナイロン糸でも代用できます。接着する際は、接着剤の中に削った角の粉を混ぜておく接着力が増します。また、穴を間違えて開けしまった場合は、削った粉を穴に詰めて、接着剤を流して固めます。

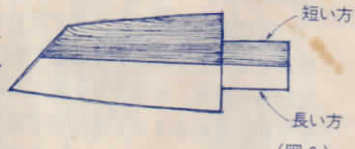
牛の角は海松などと違って入手しやすいものから、小さな和牛の角を使用する際など、つめの角から片側だけを取るつもりで吟味します。大型の角が沢山ある黄牛の場合は、1つ角から2個でも3個でも作れますが、何れの

(5)



際もハカマにする方から見て光具合が一番いいものを作ります。

最初に作るヘッドの型は、平型が簡単でしょう。コナヘッドより動きは単純ですが、左右によく動くものを作りたいものです。削り出した角の長さ



(図6)

さが異なる場合は、コナヘッドにすることを考えます(図6)。コナヘッドの斜めのカット部分は、ルアーを流すスピードによって加減します。つまり、高速で引く場合は先端部分を絞込んで細くするか、いくらか先をえぐるようにします。



(図7)

リーダーを通す穴の位置は、図のように開けると上下左右によく動きます(図7)。

●マッコウ鯨の歯

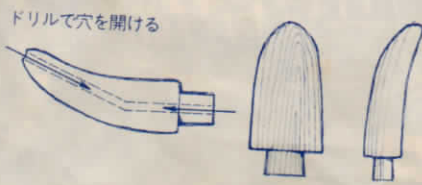
これは、まず縦に2つ割りにします。マッコウの場合は神経部分が光るので、割った面を表に出して作ります。外側を包んでいる象牙質はまるで光りませんので、削り取って使います。

マッコウの場合は、水の吸いが非常に早いので剥れやすく、目釘は必ず打たなければなりません。

●アワビ貝

アワビの場合は、内側の肉のあった部分は紫色が強くなるので、外側を削って使います。あらかじめ外殻を光が出るまでに削ってから、使用する部分に印をつけて切り出します。厚い部分で無垢のヘッドを、薄い部分は貼り合わせて使用します。貝の場合はあまり水を吸わないので、目釘を打つ必要はありません。

白蝶貝の場合は、緑の厚い部分で無垢のものが作れます。そして、湾曲した部分でヘラ型のヘッドを作ります(図8)。高速で引くには適し



(図8)



ヘッドは海松。主にクロカジキ用のため、ハカマの部分には鉛を使用。上左は砲弾型、上右は動きを出すために湾曲に削ってある。下の2つはコナヘッド、そして一番下は砲弾型。



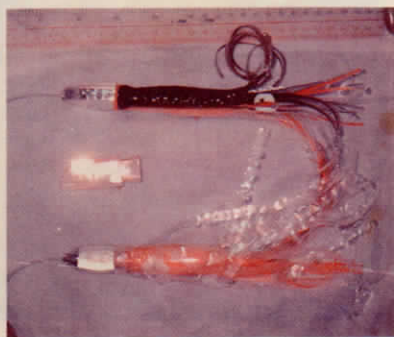
ヘッドは海松。上の小さいヘッドはメジ用、下4点のルアーはマカジキ用である。そのうち上2点はコナヘッド、下2点は平型で、ハカマの部分は鉛を使わずに軽くしてある。



ヘッドは角。上3点はマカジキ用に貼り合わせの和牛を使用した平型。下の2点は和牛の無垢で作ったもの。



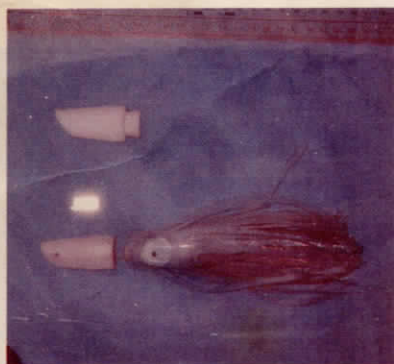
ヘッドは角。上2点は水牛の無垢を使用したジェットのコナ型。中は和牛の貼り合わせのコナヘッド。一番下は和牛をポリエステルで固めた太物。



ヘッドは貝。ジェットのメタルルアーに白蝶貝を貼ったものと、白蝶貝をポリエステルで固めたもの。上部のものはメタリックパールシートを使用している。



ヘッドは貝。日本のメ貝をポリで固めたものが一番上。次がドブ貝、下の2つはメ貝。



象牙のコナヘッド（上）と、マッコウ鯨のナックル・ヘッド（下）。

ませんが、スローの場合は非常によく動きます。この場合のラインを通すための穴開けも、前から半分、後ろから半分で、真ん中でつながるようにします。

白蝶貝を削る場合も、まず貝を水に浸して光具合を見て下さい。そうしますと、貝の内部で光があったり、キラキラと光るものがよく見えますが、それよりも1本の筋で光るものが良いようです。水に浸して光具合を確認しつつ、徐々に削っていった方が失敗は少ないものです。

また最初は、肉厚の薄い部分を短冊型に削って（この短冊は釣具店でも売っています）、これをヘッドに貼りつけ、アクリル樹脂で固定する方法が初心者向きと言えます。この場合、気に入った色が出ていない短冊には、赤いマジック等を塗ってからアクリルで固定しますと、表面はピンク色に見えます。ただ、このようなアクリル樹脂で作ったものは、外国製がたぶん日本に入っていますし、それをコピーした日本製も大変安く売られていますので、ルアー作りの醍醐味から考えますと、今一つ魅力に欠けると私は思います。

ルアーについてのあれこれ

色々な素材のバケを作っていると、片面は素晴らしい光が出るのに、別な片面はまるで光らないものなど、様々なものが出来てしまいます。それもコレクションとしては良いのですが魚の喰わないバケは一文の価値もありませんので、そんな場合は良い方の半分だけを切り取って再利用します。その際、新たに貼り合わせる素材がまるで異質のものでも問題はありません。ただ基本的には、同色系の光を発する物を考えます。例えば、水牛の角を他の素材と合わせて作る場合には、水牛の角は黒、青色系統が多いので、他の片面にはメキシコ・アワビ、または海松、黒蝶貝、マベ貝などの相性が良いと思います。次に、カバの牙の優れたバケがあ

ったとします。でも片面にはヒビ割れが入ってしまった、こんな時も片面を削り取って使います。そして、他の片面を、和牛、黄牛、白蝶貝のように、それほど色合いのかけ離れていない素材で作ります。逆に、白蝶貝とメキシコ・アワビなど、思い切って反対色の素材を使ってみるのも面白いかもしれません。

バケを選ぶ際、冬のマカジキの季節などは非常に水色が良いので、白蝶貝が最適です。また、マッコウ鯨、象牙、和牛の白っぽいものなど、色の淡いものが良いようですが、これか暖かくなって水温が上昇してくると、色の濃いバケにも喰ってきます。夜光貝やメキシコ・アワビに喰いが立つようになります。ですから、初夏のしんめカジキの時などは、皆さんか何でも喰うと言うように、ルアーのレパートリーも広がってきます。余談ですが、しんめカジキを新命カジキと書くのが本当だという人がいます。また新米カジキだと言う人もいます。どちらにしても、まだ経験の少ない幼ないカジキなので、比較的どんなバケにも喰ってきます。

私は、冬のカジキか喰うようなバケが、本当に優れたルアーだと思っています。夏の間よりも、冬の澄んだ海の方が魚を騙しにくいものです。ヒラマサのトローリングをしていると、それが良く分かります。朝方、メキシコ・アワビの目角がよく釣れていたものが、陽が昇り、すっかり明るくなるとピタリと喰わなくなる事がありません。その時に、ムロアジやサンマ、それにイカなどを使うと再びよく喰い出します。所詮、バケはバケ、魚を騙しきれないこともあるということなのです。

また、早朝の暗い時と明るくなってからとでルアーを使い分ける方もいます。例えば暗いうちはメキシコ・アワビ、明るくなってからは白蝶貝という按配です。

昨年のトーナメントの時ですが、「三水会」から出場する方に相談を受けました。「どんなバケを大会に持って行けばいいか？」と。その時の

BIG GAME FISHING

ハワイであなたのレコードを!

Pamela

キャプテン/ピーター・ホッジス
P.O. Box 345
Kailua-Kona, Hawaii 96740
phone (808)329-1525

島の周辺はキワダが回遊している情報が入りましたので、「これと心中してこい」とばい、白蝶貝のバケだけ10個持たせて、あと一泊置いてもらいました。結果、そのキワダを4~5本釣りました。

コカジキは水温が上昇してから出てきます。比較的さまざまなバケに喰います。象牙のバケも喰います。

バケの動きと大きさは非常に重要なポイント。それがすべてだ！」と断言する方もいます。船頭が、「ヒラマサが喰うバケは何でも喰いますが、良いバケは、実際、魚を選ばない。カジキのバケにカツオやメジカ喰うのがいい例です。体の半分以上もある魚に喰らいつくのですから、よほど美味しそうに見えるのでしょう。

長は房州ではトンボと呼んでいます。この場合、色の濃いバケを好みます。牛の角、メキシコ・アワビ等がいいようです。

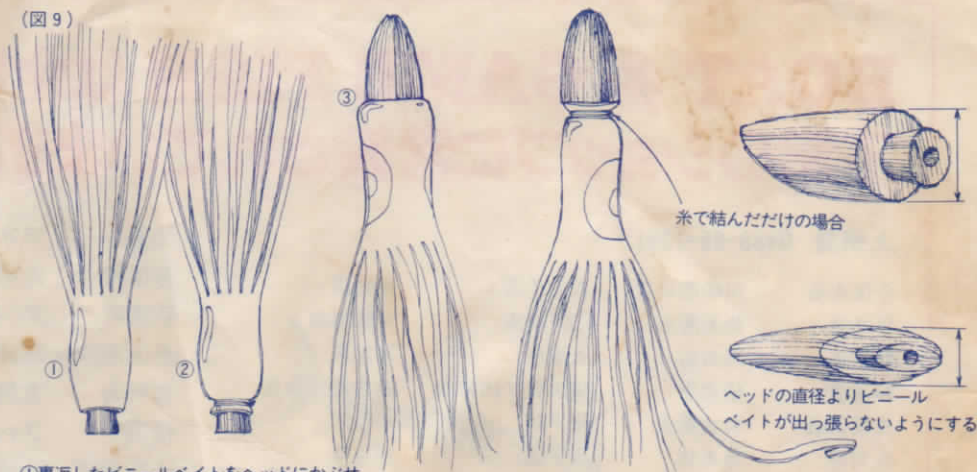
ボラも水温が上昇してから出てくるので、派手なものを好みます。この場合は、でもマッコウ鯨でもタコ（ビニール・ベイト）の方をギラギラなものにただで喰います。

オは、よく初心者に教える際にイナダとて教えます。イナダの方はギラギラしたよりもマッコウ鯨だとか白蝶の研ぎ無しと淡い光のものを好みます。逆にカツオは白蝶貝、夜光貝などを好むと教えます。象牙、マッコウ鯨、カバの牙でカツオ喰ったこともありましたが、その時のルアー自信作でしたので、さもありなんと思いが、カツオには圧倒的に白っぽいヘッドです。

マグロは、逆に色の濃いバケを好みます。メキシコ・アワビ、マベ貝、海松などに動きの激しいルアーを好みます。

マサは上層引きと中層引きとに分かれ、上層を引く場合はイナダの時のように光

(図9)



①裏返したビニールベイトをヘッドにかぶせ

②糸で結ぶ ③そしてそれをひっくり返す

の淡いマッコウ、カバの牙、象牙などを使います。中層引きの場合は弓角が一番多くなります。メキシコ貝の弓角が一番だと思いますが、カグラでやりたければ、やはり牛の角、メキシコ貝などが有利でしょう。

〈ビニールベイトについて〉

ルアーヘッド（カグラ）は、最後にはビニールベイト（タコ）を取りつくと完成となりますが、ベイトを付けるハカマの型も大切です。へら型コナヘッドなどの場合は動きが肝心ですから、ビニールベイトがヘッドの直径よりも出っ張らないようにします。一般的にはベイトを裏返してから糸で結び、それをひっくり返す方法を取るのですが、そうするとヘッドの直径よりもはみ出してしまいます。複雑な色を出すためにベイトを重ねる場合もこの方法が良いでしょう。その時は、ハカマを図のように2段にするのもいい方法です(図9)。スカートにあたるビニールベイトにはイカ型とタコ型、それにフラダンスの腰ミノのようなもの、ビニールレザー・タイプなどがありますが、やはりタコ型とイカ型のものが優れているようです。

かつて、タコとイカの違いを船頭に尋ねたことがあります。船頭曰く「イカはイカに見せる

ため、タコは魚に見せるためだ」と言いました。そう言いながら、自分のバケにはしっかりとイカ型ベイトの上からボラの魚皮を巻いていました。その海域のキワダやカジキの腹から、随分とボラが出てくるからです。またある時、船頭に「なぜイカベイトしか使わないのか？」と尋ねたことがあります。船頭はしばらく考えていましたが、ポツリと言、「タコは足ばかりだがイカの方は胴体が長いから色を得たような気がする」ですって……。

プロの意見には、経験と釣果が優先で、あまり理論的な側面はない場合もあります。

以前、ビニールベイトのタコは、足が8本だったということを聞いたことがあります。しかしそれは足の動きが悪いので、今のように足が多くなったそうです。確かにジェット・ルアーのように、ヘッドの中の水が通るルアーでは、タコタイプの方が適しているように思えます。

すべては創意と工夫ですが、最初に書いた例の2人組は、今でも時折店に来てくれます。そして今では、私の奨めたルアーを黙って買っていつてくれます。



REEL AFFAIR

CAPT.

JOHN JORDAN

1982年度HIBT キャプテン・ウイナー(2位)

ライト・タックル・スペシャリスト!! 35' Bertram, Twin V-8 Diesels

World Record Holder for Billfish and Yellow Fin Tuna

Post Office Box 2728 Kailua-Kona, Hawaii 96740 ☎(808) 325-7880

●ゲーム・フィッシングのエキスパートがハワイの釣りをコーディネートします。